

## 第2章 実践研究の基本理念

基礎的人権教育の実践研究には、人間に関して深く考察し続けることが不可欠である。「人間とは何か」「人はどのように育つのか」「私たちは何を目指して生きるのか」といった哲学的な問いに真摯に向き合うことなしには、どのように実践すべきかは決して見えてこない。

「人間とは」の問いには、古くから多数の人々が答えを見出だそうと努力してきた。幸いなことに私たちは、先人たちによる洞察の数多くの成果を享受し、そこから様々な観点を学び取ることが可能である。

ここに挙げる人生の先輩の言葉は、私たちの実践研究に多くの力を与えてくれたのである。人生の後輩として、現代に生きる私たちは、先輩たちの深い洞察を受け取り、さらに考察を深めて、未来への歩みに生かし、具体的に実践していく責任があると考えます。

以下に掲げる言葉は、基礎的人権教育の実践には欠かすことができない核であると確信する。トモエのスタッフや親たちは、人間を探究するための基盤として、これらの先人たちの言葉を通して、「人間」について常に反復して学んでいるのである。

\* \* \*

『何かを学ぶためには、自分で体験する以上にいい方法はない。』

アルバート・アインシュタイン博士

人間が成長発達する上で最も重要な刺激は「体験」である。特に乳幼児期の子どもたちは、自ら感じ、自ら考え、自らの意志で手足を動かし、様々な体験を積み重ねることが必要である。そしてこれは大人にも当てはまる。自らの主体的な体験は、動物的な直感を育て、人間の豊かな感性を養うことになる。

トモエでは、スタッフも親も子も、自ら「体験」することで、自分自身の感覚を育てている。主体的に体験したことから学び取ったことは、頭だけで学んだこととは違って、真の意味で身に付く学びであるため、最も重視している。

乳幼児期から子どもが主体的に体験し、大人（スタッフや親）は、ある時は見守り、ある時には一緒に体験し、より良い発達を助けようと心がけている。大人が乳幼児の足かせにならぬよう、お互いに確認して実践しているのが、トモエの精神的な環境である。

\* \* \*

『子どもは、大人から敬意をはらわれている度合いに応じて自分の人格を意識し、自分の人間としての尊厳を自覚して自分自身を尊重するようになります。のちに、大人になってからの道徳全体に影響を与えることとなります。』

『子どもの頃に遊ぶすべを心得ていた人は、大人になって働くすべをわきまえた人間になります。こういう人は、ものに集中する能力とか共同作業のこつ、アイデアを生み出す力など、子どもの頃遊びのために磨いていた才能を、大人になった現在、仕事に生かすことができるでしょう。』

スイスの精神医学者・ポール・トゥルニエ博士

はたして現代の我が国の子どもたちは、大人たちから敬意をはらわれているであろうか。「子どものくせに」などという言い方が根強く残っていることから容易にわかるように、子どもたちは軽んじられている。特に乳幼児は甚だしく軽視されている。

しかしながら子どもたちは、大人とは比較にならないほど感性が豊かである。周囲の大人たちが自分に対してどのように関わっているのかを、敏感に感じ取っている。自分が尊い存在であるかどうかを、日々意識して成長している。乳幼児は、親の抱き方ひとつでも、心がこもっているかないかを、肌で感じ取っているのである。

人は、自分が人間として尊重されて育つ中で、自分の人格を尊い存在と感じ、他者の存在も尊重できる人間になる。乳幼児期から自己を尊重できる環境で育った人は、幅広い人間観を身につけることになる。

大人の目を見て、自分を尊い存在として関ってくれているかどうかを判断できるのが、乳幼児である。大人たちは心して乳幼児と関わり合わなければならない。

トモエでは1986年から「障害児・健常児」という用語を使うことをやめた。「障害児・健常児」というレッテルを貼って、人を見てしまうことになるからである。レッテルを貼って区別・差別をするのではなく、その人個人のありのままを受け入れ、受け入れられ、自他共に尊重できる人間としての、人間観・価値観・倫理観を育てるためである。

その結果、大人も子どもも、自分の立場だけから他者にレッテルを貼ったり、自分の価値観を他者に押し付けるたりすることが、少なくなってきたといえる。

「子ども時代の遊び」は、集中力・意欲・共同作業の楽しさ・創造力・生きる力を養う基礎であることから、トモエの活動の中でも最も重視している。

自ら主体的に活動に取り組むこと。創意工夫して遊びを発展させること。仲間たちに配慮しつつ自己を主張して、楽しい時を共に創造すること。これらは子どもたちの中に確実に身につけていく。そして後になって様々な場面で、それらの身についた能力が発揮される事例を、私たちは数多く観察してきた。

私たち大人の重要な役割は、子どもたちが自ら取り組む活動に思いきり熱中できるように、子どもの世界を保証することであろう。

\* \* \*

『人間の創造力とは、人間の“永遠の子どもらしさ”そのものです。それは、その人間が八歳であろうと八十歳であろうと、まったく同じです。人間が子どもであることをやめた時に、この創造力もまた失うのです。人間における本来の人間らしさとは、この創造的な能力にあると思います。』

『ファンタジーとは、新しい概念を考え出すこと、すでにある概念を新しい関連に置きかえることにほかならないのですから。つまり創造力そのものです。』

作家・ミヒャエル・エンデ氏

「NHKアインシュタインロマン6・エンデの文明砂漠」(日本放送出版協会)より

大人の頭の中は先入観や固定観念だらけだといえよう。しかし、乳幼児の感性は柔らかい。固定観

念がとても少ないのである。大人には決してできないような発想で、様々な遊びをどんどん展開していく。

子どもたちはしばしば仲間とぶつかり合う。しかし、喧嘩をしても、すぐ仲直りができるのが乳幼児である。「許す・許さない」という概念がないのである。相手のありのままを受け止め、認めることができるのである。この時期にこそ、多くの人と親しく関わり合うことが必要なのである。

乳幼児は日々新しいことに挑戦している。何度失敗しても、めげずに立ち向かっていく。乳幼児にとっては、何かを学び身につける過程がすなわち生きていくということであり、日々のすべてが創造である。

人間が生きるということは、創造の日々であるといえる。「人間」という謎、「自分自身」という謎に向き合いつつ、人間は新しい体験と出会う。日々新しい自分と出会う。

新しいということは、創造し続けるということである。

何歳であろうと、子どもたちが持っている「本来の人間らしさ」を失わず、さらに生き生きと育むために、トモエの大人たちは乳幼児と関わり合い、体験をさせてもらっているのである。

\* \* \*

『子どもたちの世界は、いつも生き生きとして新鮮で美しく、驚きと感激に満ち溢れています。残念なことに、私たちの多くは大人になる前に、澄み切った洞察力や、美しいもの、畏敬すべきものへの直感を鈍らせ、あるときはまったく失ってしまいます。』

もしも私が、すべての子どもの成長を見守る善良な妖精に話しかける力を持っているとしたら、世界中の子どもに、生涯消えることのない“センス・オブ・ワンダー＝神秘さや不思議さに目を見はる感性”を授けてほしいとたのむでしょう。

この感性は、やがて大人になるとやってくる倦怠と幻滅、私たちが自然という力の源泉から遠ざかること、つまらない人工的なものに夢中になることなどに対する、かわらぬ解毒剤になるのです。』

『妖精の力にたよらないで、生まれつきそなわっている子どもの“センス・オブ・ワンダー”をいつも新鮮に保ち続けるためには、私たちが住んでいる世界の喜び、感激、神秘などを子どもと一緒に再発見し、感動を分かち合ってくれる大人が、すくなくとも一人、そばにいる必要があります。』

『私は、子どもにとっても、どのようにして子どもを教育すべきか頭を悩ませている親にとっても、“知る”ことは“感じる”ことの半分も重要ではないと固く信じています。』

『美しいものを美しいと感じる感覚、新しいものや未知なるものに触れたときの感激、思いやり、憐れみ、賛嘆や愛情などのさまざまな形の感情がひとたび呼び覚まされると、次はその対象となるものについて、もっとよく知りたいと思うようになります。そのようにして見つけた知識は、しっかりと身につきます。』

消化する能力がまだ備わっていない子どもに、事実をうのみにさせるよりも、むしろ、子どもが知りたがるような道を切り開いてやることの方がどんなに大切であるか、わかりません。』

『人間を超えた存在を認識し、おそれ、驚嘆する感性を育み強めていくことには、どのような意義があるのでしょうか。自然界を探検することは、貴重な子ども時代を過ごす愉快で楽しい方法のひとつにすぎないのでしょうか。それとも、もっと深い何かがあるのでしょうか。』

私は、その中に、永続的で意義深い何かがあると信じています。地球の美しさと神秘を感じとれる人は、科学者であろうとなかろうと、人生に飽きて疲れたり、孤独にさいなまれることは決してない

でしょう。たとえ生活の中で苦しみや心配事に会ったとしても、必ずや、内面的な満足感と、生きていることへの新たな喜びへ通ずる小道を見つけ出すことができると信じます。

地球の美しさについて深く思いをめぐらせる人は、生命の終わりの瞬間まで、生き生きとした精神力を保ち続けることができるでしょう。』

レイチェル・カーソン博士  
「センス・オブ・ワンダー」(新潮社)より

美しいもの、未知なるもの、神秘的なものに目を見はる感性「センス・オブ・ワンダー」を、私たち現代人は錆び付かせてしまった。感性が非常に豊かなはずである乳幼児たちでさえ、都会化し機械化された生活環境の中で、この感性を鈍らせている。

自然も人間も、謎に満ちている。不思議と神秘を発見する喜びに胸をときめかせることができる。それは、現代の人間が失いつつある動物的な素晴らしい感覚・直感を多く養うことにつながる。

トモエでは、人間本来の感性である「センス・オブ・ワンダー」をよみがえらせ育てていくために、豊かな大自然の中で、たくさんの人々と出会い、自然と人との親しく関わり合うことのできる環境を創造している。

トモエには、乳幼児から小中高大学生・父母・祖父母・実習生・スタッフ等、毎日百数十人もの人たちが参加して、それぞれが自由に活動している。子どもたちは、自分の家族以外にも、大好きな友人や赤ちゃん・お母さん・お父さん・スタッフたちと関わり、人間と関わる喜びの輪を広げている。赤ちゃんからお年寄りまで幅広い年代の多様な個性の持ち主と関わり合うことができるため、子どもたちは心許せて寄り添ってもらえる人との関係を創ることができる精神環境なのである。

子どもたちは多くの人と関わり、人それぞれに豊かな個性があり、それぞれが可能性に満ちた存在であることを、肌で感じ取りながら生活している。

人と自然とに親しく関わる生活体験の中では、子どもたちは実に多くのことを感じている。多くを感じることは多くを考えることにつながる。自ら主体的に感じて考える人間は、豊かな自然環境の中で多様な体験を積み重ね、多くの個性と出会いながら多様な人間関係を創造できる生活環境によって育まれると確信して、実践し続けている。

\* \* \*

ここに記したのは、私たちが学んできた資料の、ごく一部である。人間を探究し実践研究を深めていくためには、学ぶべき事項は尽きない。

私たちはさらに前進するために、以下の言葉を園内に掲げて自分たちの歩みを意識しようと努力している。

『個々が自らの可能性を信じ、夢と希望を持って、自らに期待をかけて生きることが、教育の目標ではないでしょうか。』(木村仁)